
I LIVE IN...

陸たまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I L I V E I N . . .

【Nコード】

N 3 2 6 5 J

【作者名】

陸たまき

【あらすじ】

目が覚めるとそこは夢の中だった。隣には、事故で入院中の好きな人。

少し悲しい話です。

ああ、これは夢だ。

漠然と、けれど確信を持って私は思った。
だって周りの景色がなんだか色あせてるし。
何より隣に安田君がいる。

「あ、起きた？」

私の顔を覗き込んで、安田君が優しく笑いかける。
胸の奥から暖かさがこみ上げてくるのを感じながら、私もつられて
笑った。

ここは多分、学校の近くの公園だろう。私達がいる所は、その公園
の中にある、桜の木の下らしい。
景色にははつきりした境界線がなくて、水彩画のような柔らかな色
しか見えない。

日光の暖かさで、今が昼間だとわかる。

いつまでも寝転がっている私に、安田君が笑い出す。

「昼真つから寝てるとボケちゃうよ。いい若いもんがさ
…」
「親父くさいなあ」

いつもの調子で言い返して起き上がると、何処から吹いてくる暖
かい風が、髪をなびかせた。

桜の木の幹に寄りかかる安田君にならって、私も背をあずけてみる。

「俺さ、ここ好きなんだ」

「…うん。私も」

「嫌なことでも、いいことでも、何かあると必ずここに来るんだ。

まあ、帰り道だから嫌でも通るんだけどさ」

目を閉じて、安田君の声を聞く。まるで暖かいお湯の中にいるみたいだ。

「なあ…高瀬はさあ、自分ではどうにも出来ない事を、どうにかしたいって思ったことある？」

「…うん…」

なんだかいつもの安田君と違うけど、夢の中だからいいかと思い直す。

「例えばもう少し頭が良ければな」とか、美人だったらな」とか」

そう、そうしたらきつと、安田君に告白する勇気を持てるのに。

そんな事を思っているとはちつとも知らないで、安田君が笑う。

「…いや、違うな。そういうんじゃないよね。安田君が言ってるのは…」

安田君が、問いかけるように私を見つめる。

「そういう風に思うことはしょっちゅうあるけど…でも実際にどうにも出来ないことって、人生のうちにそうないよね」

「…うん」

何だろう。夢の中だと、不思議と言葉が素直に出てくる。

「でも私、もし本当にそういう事があつたとしても、認めたくないよ。だって認めちゃったら、自分で何かする前に、もう無理だってあきらめちゃうでしょ？そりゃあ、人が死んじゃうこととかはどうしようもないけど…。でもそういうのもさ、その時はすごく悲しくても、時間が経てば思い出になって笑えるようになるんだから。人間ですごいよね」

ふっと、安田君の笑顔が小さくなった。

「小林のそういうところ、俺、好きだな」

「……」

真っ赤になつてゐる私をよそに、安田君は遠くを見つめた。

「思い出か……。俺も、人の思い出の中でしか生きられない存在なんだよな……」

「……え？」

言葉の意味がわからなくて、反応が遅れる。

「俺、死んだんだ」

目が覚めるとそこは、境界線のはつきりした現実世界。

最悪の夢見だ。

嫌がる体を引きずって、私は制服に着替えた。

実は安田君は今、学校にいない。交通事故で入院している。

一時は本当に危なかったらしいが、一命は取り留めて、今は集中治療室に入っている。

あまりに私が安田君のことばかり考えているから、あんな夢を見たのだろうか？

学校からの帰り道。

ふと、あの桜の木の公園へ行ってみた。なんだかそこにいけば、安田君のことが感じられるような気がして。

夢の中と同じように、桜の木に寄りかかってみる。

「よっ」

突然、頭上から声が降ってきた。私は息を吞んで飛び上がる。

恐る恐る見上げた先には…人影？

「安田君…？」

桜の木の幹に腰掛けているのは、間違いなく安田君だった。声を上げて笑っている。

「最高！その反応…」

久しぶりの安田君の笑い声だ。それが非現実的だということも忘れて、私は涙が出てきてしまった。

「安田君…何してんのぉ？」

「ちよつとね。気分転換？」

「っ！ダメだよ！早く病院に帰らないと！」

何故か傷ついた顔をして、安田君が言う。

「もう俺、帰る場所なんてないもん。強いて言えば、天国とか？」

私は返す言葉がない。

「言つたろ？俺死んだんだって。小林はそれを認めてないだけなんだよ」

「…何」

だんだん気味が悪くなってきた。

これは誰だろう？

風がざあざあ言っていて、声がよく届かない。桜の影が揺れて、彼の顔が見えない。

私は後ろを向いて駆け出した。

「自分の死を悲しんでくれるのは嬉しいよ。でもそれが…小林をこんな風ににしちゃうなんて、俺、つらいんだ…」

泣き出しそうな小林君の声。

はっとして振り向いた時には、もう誰もいなかった。

「あ、起きた？」

ここはきつと夢の世界。

目の前で、昨日と同じに笑う安田君。

「ねえ…これはなんなの？」

草の上に寝転んだまま、泣きそうになって私は尋ねる。

「ここは小林の夢の中。願望が実現する世界」

静かに、安田君は言った。

「願望…？」

「うん。小林の、俺に会いたっていう願望と、俺の、小林に俺のことなんか早く忘れて、自分の人生歩んでほしいっていう願望」

「…認めたくない」

頬を伝う涙を隠すため、腕で目を覆う。安田君が小さくついたため息に、心臓がどくんとなった。

「でも人の死だけはどうすることもできないって、知ってるじゃん」

「知らない」

「小林…」

「知らない。そんなこと認めたくない。安田君になんて会いたくなかった！勝手に夢なんかに現れないで！早くどっか行ってよ！そうすれば…こんな思いしなくてすんだのに…！」

さあつと風が吹く。

ハッとして気づいた時にはもう、安田君の姿は消えていた。

『願望が実現する世界』

私は今、確かに思った。

安田君なんか、消えてしまえばいい……と。

安田君は、亡くなっていた。

私だけがそれを認められなくて、母や友達は心配していた。

彼は事故の翌日、病院で息をひきとったそうだ。

母は優しく抱きしめてくれた。友達も、私が現実を受け入れたことを喜んでくれた。

私は、笑うことさえ出来るようになった。

けれど、笑う顔とは裏腹に、心が冷えていくような気がした。

…安田君を、傷つけた。

あの夢を、自分が見せた幻だとは思わなかった。

安田君は私の夢の中で生きていた。生きていてくれたのに、私は彼を、殺してしまったのだ。

気がつくと私は、どこかのマンションの屋上に来ていた。

眼下に広がる世界を、どこか別次元の事のような気持ちで眺めていた。夜の街は綺麗だった。こんな中で死ねるなら幸せなのかもしれない。

手すりを放し、下へと飛び降りる。

……次は、もうないはずだった。

なのに。

「ふうー、危機一髪」

私は安田君に抱えられて、コンクリートの屋上に座り込んでいた。

「おまえなあ、危ないだろうが!!」

「……な、何で」

何で安田君がここにいるんだろう。

何で私を助けるの？

「…心配、だったんだよ」

ぼつりと呟いた安田君の言葉に、抑えていた涙があふれてきた。

「…中途半端なこと、しないでよ」

「え？」

「ずっと助けられるわけでも…そばに居てくれるわけでもないのに！」

こんなにそばにいるのに、安田君はまるで霧みたいだった。手だつて、とても冷たかった。

「何ヤケになつてるんだよ」

「ヤケにだつてなるよ!だつて…私、どうすればいいの…。ずっと、安田君の事好きだったのに!」

熱い涙が頬を伝っていく。

「ばーか。んなこと知ってんだよ」

安田君が頭をくしゃくしゃとなでる。

ずっと隠していた気持ちを口に出してしまつと、もう感情があふれ

出すのを止められない。

「ずっと好きだって言いたかったのに…なんで、なんで勝手に死んじゃうの…。どうしていいかわかんないじゃん」

「うん、ごめんな」

素直に謝られてしまうと、返す言葉がない。

「でもさ、俺、小林には生きてて欲しかったんだよ。だって自分のせいで誰かが死んじゃうなんて嫌じゃん？」

「…ずるいよ。そんな事言われたら死ねない」

「あはは。うん、ずるいんだ俺。ずるいつでもうひとつ言っている？」

「どうせロクなことじゃないんでしょ？」

睨み付ける私の涙を指先でぬぐって、耳元に唇を寄せて安田君がささやいた。

「俺も、ずっと小林のこと好きだったんだ」

溢れてくる涙を、優しい風がぬぐってくれた。

「…ありがとう」

もう少しだけ泣いたら、家に帰ろうと思いつながら私は言った。
遠い彼の元まで、この声が届けばいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3265j/>

I LIVE IN...

2011年1月28日06時48分発行